

## 第二十五章～第二十七章

### 〈第25章〉について

#### 第25章の概略

第25章は、資本の行動を規定する「信用」の機能の説明とともに、第22章の「(後の仕上げのための覚え書)」で簡単にふれられていたことと、第24章の「利子生み貨幣資本」の「資本の神秘化」、あるいは、将来の儲けから現在の「資本」の価値をはかる、「資本」の「架空性と投機性」とが、資本の行動と「信用」の機能を通じて、資本主義的生産の循環過程を支配する様子が展開されています。

簡単に文章のすじを辿ってみます。

①「信用制度」は「生産者や商人どうしのあいだの相互前貸」から発展したことを述べ、その実態を草稿中の資料で紹介し、②同時に、貨幣取引業の発展が利子生み資本の管理という「信用制度」のもう一つの面を発展させ、貸し手の集中と借り手の集中を実現したこと、銀行業者が与える信用はいろいろな形で与えられることを述べ、③②を踏まえて、銀行業者の二重の業務について、信用の貨幣機能について、銀行の利潤の得かたについて、銀行によって取引が容易になり資金に余裕が生まれ、信用により使用される貨幣の何倍もの決済ができることについて、エンゲルスは、草稿中の資料を一部省略し一部要約して引用している。④エンゲルスは、このような信用の機能にもとづいて草稿中の資料が示す実例を説明するために二、三のことだけを簡単に述べるとして、1842年の末から1848年間のイギリスの経済・信用の動きを説明する自らの文章(パラグラフ)を挿入する。⑤続いてエンゲルスは、Iとして、草稿の他の箇所にあった、1847年の恐慌中に国債と株が非常に減価したという内容の資料を挿入し、続けて、③につづく草稿中の文章をII、IIIとして編集する。⑥IIでは、信用によって資金の行き詰まりを一時的にさき延ばす実例が、IIIでは、1847年4月のイングランド銀行の手形割引業務の縮小が手形の有効期間を短縮させたこと、1847年4月にはほとんどすべての商社の資金が逼迫したこと、投機業者から振り出される非常に多くの手形があること、生産物の価値実現の前に信用(手形)によって貨幣を手に入れたり信用を使った一時的な錬金術などが述べられている。⑦エンゲルスは、草稿の他の箇所の文章を使ってIV及びVとして、第25章の編集を終えます。IVでは、1847年の恐慌の原因に関して、信用の不相応な膨張が現れたこと、十分な担保がなければ手形は引き受けないが外国からの手形が空手形かどうかは見分けることができず、破局の頂点では「各自自由に逃げよ」が展開されることを述べ、最後にVで、1857年にも同じことが行われていることをのべています。

このように、第25章は、エンゲルスの補足によって「恐慌」にまで踏み込んでいますが、信用制度の確立の経過と役割及び信用制度の抱える資本(貨幣)創出機能、そのもとの資本の行動について、マルクスの草稿の趣旨が十分に生かされた編集となっています。

#### エンゲルスの編集についての大谷氏の批判について

大谷氏は、第25章は、基本的には草稿の317-320からなっているが、若干の部分はそれ以外のところから取られ、エンゲルスによる文章もある(第2巻 P63-64、以下括弧内の

「第2巻」は省略)といい、エンゲルスの編集を批判しています。

マルクスの草稿に従って、大谷氏の見解を見ていきましょう

### **マルクスの草稿【317上②】(P157-158)に関して**

大谷氏は、第25章に係るマルクスの草稿の最初のパラグラフの「われわれはただ商業信用だけを取り扱う」というフレーズの「商業信用」をエンゲルスが「商業・銀行業者信用」に変えたことが、「従来『商業信用と銀行信用』と訳され」、そのことにより、「信用論ではこの二つの信用を論じることがその根幹をなすという理解を支える重要な典拠となってきた」(P126)と、エンゲルスに咎があるかのように言います。

エンゲルスが草稿の「商業信用」という言葉を、文脈の中で、わかりやすく「商業・銀行業者信用」と言い換えたことがどうして責められなければならないのか。「商業・銀行業者信用」というワードを日本の研究者が「商業信用と銀行信用」と訳して、それがたとえ文脈の中で誤っていたとしても、それはエンゲルスの責任ではない。また、「商業信用と銀行信用」とを論じることが信用論の根幹でないならば、それは、信用論の根幹が「商業信用と銀行信用」だと論じた研究者の責任であり、絶対に、エンゲルスの責任ではありません。

それぞれのケースで何が真実かを探求するのが科学的社会主義の思想の基礎であり、宗教ならまだしも、誰かが言ったことを「典拠」とするような人たちにマルクス経済学を語る資格などありません。「典拠」(?おかしな表現だ)としている人たちの理論が誤っているならば、大谷氏はその人たちの理論を批判すべきで、「典拠」(?)となった書物を責めるべきではない。

この文章のなかに出てくる「商業信用」という言葉は、大谷氏も言うように、「私的信用一般」を指していて、「再生産に携わっている資本家が互いに与え合う信用」だけを意味するものではありません。そして、これに続くパラグラフ(マルクスの草稿【317上③】)で「生産者や商人どうしのあいだの相互前貸」という表現で、本来の「商業信用」についての叙述があり、その次のパラグラフ(マルクスの草稿【317上④および⑤】)で「銀行信用」についての叙述があるので、エンゲルスは「商業信用」という言葉を「商業・銀行業者信用」と変えたのです。これを受けて、大月版『資本論』ではエンゲルスの「商業・銀行業者信用」という表現を「商業信用と銀行信用」と変えて、読者に一層理解しやすくしたのです。

この、エンゲルスや日本の訳者のどこに問題があるのでしょうか。

### **マルクスの草稿【317上③】(P159-160)に関して**

最初に『資本論』の当該部分を転載し、つぎに大谷氏の見解の概要を紹介し、最後に私の意見を述べさせていただきます。

〈『資本論』の当該部分の転載〉

私は前に(第一部第三章第三節 b)、どのようにして単純な商品流通から支払手段としての貨幣の機能が形成され、それとともに商品生産者や商品取引業者のあいだに債権者と債務者との関係が形成されるか、を明らかにした。商業が発展し、ただ流通だけを念頭において生産を行う資本主義的生産様式が発展するにつれて、信用制度の自然発生的な基礎は拡大され、一般化され、完成されて行く。だいたいにおいて貨幣はここではただ支払手段としてのみ機能する。すなわち、商品は、貨幣と引き換えにではなく、書面での一定期日

の支払約束と引き換えに売られる。この支払約束をわれわれは簡単化のためにすべて手形という一般的な範疇のもとに総括することができる。このような手形はその満期支払日までではそれ自身が再び支払手段として流通する。そして、これが本来の商業貨幣をなしている。このような手形は、最後の債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する。なぜならば、その場合には貨幣への最終的転化は生じないからである。このような生産者や商人どうしのあいだの相互前貸が信用の本来の基礎をなしているように、その流通用具、手形は本来の信用貨幣すなわち銀行券などの基礎をなしている。この銀行券などは、金属貨幣なり国家紙幣なりの貨幣流通にもとづいているのではなく、手形流通にもとづいているのである。(大月版④P502-503)

まとまりのある、誰でも理解可能な文章です。

#### 〈大谷氏の見解の概要紹介〉

④エンゲルスが取り入れなかったマルクスの引用でマルクスは、「信用による貨幣の代位、貨幣機能の遂行は、信用制度のもとでは、銀行券流通と預金の振替という新たな形態をもつようになるが、その基礎が手形とその流通とにあるのだということ」を考えていた。

(P86-87)

⑤エンゲルスは、マルクスの草稿の「信用制度の本来の基礎」となっているところを「信用の本来の基礎」とし、「信用」、「信用システム」、「信用制度」を「ほとんど彼の語感によって……ほとんど恣意的なもの」にしており、その結果「信用システム」と「信用制度」との区別を見えないものにしてしまっているという。同時に「マルクスがどこでも」両語(「信用システム」と「信用制度」)を明確に使い分けているとも言いがたいともいう。

(P88-89)

⑥「信用制度」とは銀行制度を主要内容とし、だから、このパラグラフは「信用＝銀行制度」の「さまざまな信用形態を取り扱い、さまざまな信用操作を行うことを一つの本質的な特徴としている」そうした「側面とその基礎について述べている」。(P89-90)

⑦「以上要するに、この本文パラグラフでは信用制度の信用システムとしての側面、「信用取引」という側面、およびそこで用具として用いられる信用貨幣、とその基礎とについて書かれているのである」。(P91)

#### 〈私の意見〉

④については、『資本論』の当該部分を読めば容易に理解できることです。

⑤についてですが、大谷氏がP83で『経済学批判』から引用した文章中の「信用システムが存在するよりも以前に」という文の中の「信用システム」という語が、その直後に出てくる「信用制度」と同一の意味に使われていると思われる点からしても、「信用システム」も「信用制度」も資本主義的生産様式のもとでの「信用」を意味していると思います。

⑥と⑦での「本文パラグラフ」の理解のしかたについてですが、書いてあることを正しく理解すればよいと思います。

「資本主義的生産様式が発展するにつれて、信用制度の自然発生的な基礎(商品生産者や商品取引業者のあいだに債権者と債務者との関係)は拡大され、一般化され、完成されて行く。ここでの貨幣の機能は支払手段である。だから、手形が、最後の債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する。

生産者や商人どうしのあいだの相互前貸が信用の本来の(元々の)基礎であり、手形が信

用貨幣すなわち銀行券などの本来の(元々の)基礎をなしている。

この流通用具としての銀行券などは、金属貨幣なり国家紙幣なりの貨幣流通の機能にもとづいているのではなく、手形流通の機能、つまり貨幣の支払手段としての機能にもとづいている。」と。

つまり、マルクスとエンゲルスは、ここで「信用制度」の「商業信用と銀行信用」という二つの面のうちの「商業信用」の本質について述べています。

#### **マルクスの草稿【317上④および⑤】(P168-171)に関して**

〈大谷氏の批判に関する部分のマルクスの草稿の抜粋〉

信用制度の**他方の側面**は貨幣取扱業の発展に結びついている。……貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の**他方の側面**が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるいは**貸付可能な貨幣資本**の管理である。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼らは**貸付可能な貨幣資本**の現実の貸し手と借り手とのあいだに媒介者としてはいつてくる。一般的に表現すれば、銀行業者の業務は、**一方では、貸付可能な貨幣資本**を自分の手中に大規模に集中することであり、したがって個々の貸し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として再生産的資本家に相対するようになる。彼らは**貸付可能な貨幣資本**の一般的な管理者としてそれを自分の手中に集中する。**他方では**、彼らは、商業世界全体のために借りるということによって、すべての貸し手に対して借り手を集中する。(……)銀行は、**一面では貸付可能な貨幣資本**の、貸し手の集中を表し、**他面**では借り手の集中を表しているのである。(P168-171)

注)青字の「**貸付可能な貨幣資本**」は青山が「monied Capital」という言葉を正確に表現した。また、……は青山の略。

〈大谷氏の批判と私の考え〉

大谷氏は、「monied Capital」という言葉を「貨幣資本」と訳したことについて、「エンゲルスは——ドイツ語での印刷用原稿を作るためにはやむをえなかったことではあるが——monied Capital等々も、ドイツ語(Geldkapital)に訳して統一した。そのために、原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる」(P103)と言って批判します。

このパラグラフにおける「monied Capital」の意味は「**貸付可能な貨幣資本**」であるが、同じパラグラフの中に「**貸付可能な貨幣資本**」というフレーズがあるので、正確に表現するとマルクスの草稿は上記のようになり、「**monied Capital**」と「**貸付可能な貨幣資本**」とが同一の表現になってしまう。そこで、エンゲルスは「monied Capital」と「**貸付可能な貨幣資本**」とのドイツ語文での差を出すためにあえて「貨幣資本」と表現したように思われるが、パラグラフ全体を理解するうえでまったく問題はない。そして、その次のパラグラフでは、「monied Capital」を「貨幣資本」と表現することこそが合理的である。

第24章の「おまけ、「貨幣資本」について」で触れたように、日本語の「貨幣資本」という言葉が、価値実現過程(生産的資本の循環過程)での「貨幣」という意味とともに「利子生み資本」としての「貨幣」という意味をもち、「利子を生むということが貨幣の属性になる」社会(資本主義社会)での信用制度を論じているところで「monied Capital」を「貨幣資本」と訳すことが「原文のニュアンスが失わ」せることはない。もしも、「原文のニュアンスが失われている場合」があるなら、具体的に指摘すべきです。

また、大谷氏は「一方では……、他方では……」の内容を、最後の文で「一面では……、他面では……」として要約していることは一目瞭然である。ところが、エンゲルスはこのうちの「一方では」という語を「この面から見れば」と書き換えた。これは誤りだと言う。

しかし、「貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるいは貸付可能な貨幣資本の管理である」等の文章を見れば分かるとおおり、この草稿は非常に完成度が低いものです。そのことを踏まえて私の意見を申し上げます。

このパラグラフは信用制度の「他方の側面」（貸付可能な貨幣資本の管理の側面）について述べたものです。そして、「一方では」以下で、銀行業者が貸付可能な貨幣資本の一般的な管理者であることを述べているので、エンゲルスはあえて「一方では」という語を「この面から見れば」と書き換えることによって、銀行業者が貸付可能な貨幣資本の一般的な管理者であるというマルクスの考えを明確にしようと思ったのでしょうか。そして「他方では」と表現されているところは、「他方で、それはまた」程度の意味だと思われ、「一面では……、他面では……」というセンテンスが「一般的に表現すれば、……」以下の二つのセンテンスの要約だとの大谷氏の主張は、あまりにも安易な理解だと思います。

このように、このパラグラフは、「信用制度」の「商業信用と銀行信用」という二つの面のうちの「銀行信用」の意義を明らかにしており、マルクスの草稿で「公信用」との対比で「商業信用」といっているものを『資本論』で分かりやすく商業信用と銀行信用とに分解したエンゲルスの編集意図と日本の訳者の意図とが明確になります。

次に大谷氏は、大谷氏のいう「信用制度についての雑録」部分の「エンゲルスによる手入れ」について、「エンゲルスは、この第25章のなかに「架空資本」を見いださなければならなかった」、だから、「他の箇所で見いだされた材料の挿入」（エンゲルスの序文）として、I、IV、Vという三つの草稿を挿入したという。同時に大谷氏は、このホームページのはじめに述べたように、第1巻の「はしがき」で、恩師である三宅義夫氏が『資本論』第3部第5篇の全体の編成について、誤った「定説」を主張する論拠のほとんどすべてが、草稿第5章の編成を正しく読みとれなかったエンゲルスが自分の誤った理解に合うように行った手入れの箇所だったとも言っています。

誰でも認めるように、『資本論』第五篇は、「草案」も「筋書きさえもなく」、「ただ仕上げの書きかけがあるだけ」でした。だからエンゲルスも、マルクスがこの篇に「与えようと意図したすべてのものを少なくともおおよそは提供するようにする」と、「それはマルクスの著書ではない」ものになるので、そのような編集をあきらめ、「現にあるものをできるだけ整理することに限り、ただどうしても必要な補足だけを加えるということ」としたのです。（大月版『資本論』P9-10）

マルクスがこの篇に「与えようと意図したすべてのものを少なくともおおよそは提供するようにする」ために、エンゲルスが「マルクスの著書ではないもの」を編集するとしたら、それは、「架空資本」に関しても、第二九章（銀行資本の諸成分）と第三〇章（貨幣資本と現実資本）等の大幅な再編集が必要になったかもしれませんし、第二六章（貨幣資本の蓄積—それが利子率に及ぼす影響）もその詳しい論究は第三〇章以降に置き、これまた、大幅な再編集が必要になったかもしれませんし、第二八章（流通手段と資本）の配置もその中で大きく変化したことでしょう。その結果、大谷氏の言う「雑録」も「搜論」も、マル

クスの『混乱』も、最終稿のための材料の部品になり、『資本論』第五篇は現在の『資本論』とはかなり異なるものになっていたことでしょう。

「貨幣」と「信用」と「貨幣資本」と「現実資本」の資本主義社会での複雑な絡み合いのなかで、「マルクスがこの篇に与えようと意図した」とおりに提供できるのは、無二の友であるエンゲルス以外にいません。そのエンゲルスが決断し、行った手入は、必要最小限のものでした。その結果、第 25 章は、先に示した「第 25 章の概略」のような編集になったのです。だから、苦勞に苦勞を重ねたエンゲルスに対して、草稿第 5 章の編成を正しく読みとれなかったという大谷氏こそ、エンゲルスの編集の意図をまったく理解することができなかったということができません。

また、大谷氏はこの章に出てくる「架空資本」と第 29 章相当部分で論じられる「架空資本」とは違うといます。その通りですが、そう単純に言い切れるものではありません。第 29 章では銀行資本の諸成分は現金と有価証券からなっていること、その有価証券は貨幣資本という「架空資本」によって得られること、その最大部分である手形による「信用」拡大を中心に有価証券の「架空資本」としての架空性を、「他の箇所で見いだされた材料の挿入」を含めて「実例」で示し、銀行資本の諸成分が第 25 章で論究した「架空資本」で満ちていることを述べています。

エンゲルスはこのように、第 29 章へ繋がるものとして、第 25 章の後半で、資本主義的生産様式のもとでの「信用」の役割とその「架空資本」としての特質を、マルクスの草稿の流れに沿って「現にあるものをできるだけ整理し」、「ただどうしても必要な補足だけを加えるということ」通じて編集したのです。

このエンゲルスの編集のどこに、大谷氏の恩師である三宅義夫氏の誤った「定説」の論拠があるのか、私にはわかりませんが、ここでエンゲルスが編集した内容に誤りがないことだけは確かです。

## 〈第26章〉について

### 第26章の概略

この章は、第 25 章の続きで、貨幣資本の蓄積に関する「通貨理論論評」等からの抜粋、それを受けての、『銀行委員会』での問答の引用を通じての、主としてオーヴァーストーンの銀行業者の立場からの貨幣資本にたいする見方の矛盾と混乱および貨幣資本の蓄積と利子率の関係についての曖昧な態度の追求とからなっています。

最初の貨幣資本の蓄積に関する「通貨理論論評」等からの抜粋では、大谷氏の言う「雑録」の最後の部分で、貨幣資本の蓄積が増えるとその充用先が必要となり金あまりが投機を作ること、イングランド銀行の金融政策のもとでの輸入の大超過の結果遊休資本が減少し信用が厳しくなり、その結果、ユダヤ人や貨幣取引業者が儲かったこと等が述べられています。

次に大谷氏のいう「挿論」部分(大月版 P530 の 2 行目以降)では、上記を受けて、ノーマンとオーヴァーストーンの謬論への批判がおこなわれている。ノーマンは銀行券は資本である商品を買うためにあり、貨幣資本に対する需要は貨幣そのものに対する需要ではないという。このノーマンの主張にマルクスは、異なる商品を扱う者も同じ利子率で貨幣を手

に入れることを指摘して論駁します。また、マルクスは、オーヴァストーンが、利子率の上昇は利潤率の上昇の結果であり、資金需要は事業拡大と結びついていると考えたり、自分の都合しだいで「資本の価値」を現実資本に関係させたり貨幣資本に関係させたりしているが、オーヴァストーンにとっての「資本」の意味は「利子を取って貨幣を貸し出すこと」にあるということ、『銀行委員会』でのオーヴァストーンの間答を通じて明らかにします。

マルクスは、これらを通じて、ノーマンもオーヴァストーンも、「貨幣資本」についても「貨幣資本」の蓄積と「利子率」との関係についても、正しい認識をもっていないことを曝露します。

#### 〈第26章への大谷氏の批判〉

大谷氏は、第 26 章がマルクスの「草稿のテキストとほぼ一致している」ことを認めつつ、「エンゲルスが第 26 章をつくるときに犯したと考えられる過誤は、大きく言って二つある」(P218-219)という。

過誤の第一が、「エンゲルスは小部分への小見出しを第 26 章部分全体につけられた表題だと勘違いした」と推測され、第 26 章に付けられた表題がこの章全体の内容を表すものとはなっていないこと。第二が、第 26 章は、第 25 章に付随する「雑録」と続けて書かれた「捜論」からつくられており、第 26 章を第 25 章の本文部分および第 27 章と対等に置くべきではなかったということ。「このような第 26 章の表題と内容(?内容は「草稿のテキストとほぼ一致している」と認めているのになぜ——青山)と位置とが、第 5 篇の第 25 章以降の展開の筋道をきわめてわかりにくいものにし」(P221)たといいます。

#### 〈私の意見〉

私は、「〈第 25 章〉について」の「マルクスの草稿 [317 上④および⑤] について」の項で次のように書きました。

「誰でも認めるように、『資本論』第五篇は、「草案」も「筋書きさえもなく」、「ただ仕上げの書きかけがあるだけ」でした。だからエンゲルスも、マルクスがこの篇に「与えようと意図したすべてのものを少なくともおおよそは提供するようにする」と、「それはマルクスの著書ではない」ものになるので、そのような編集をあきらめ、「現にあるものできるだけ整理することに限り、ただどうしても必要な補足だけを加えるということ」としたのです。(大月版『資本論』P9-10)

マルクスがこの篇に「与えようと意図したすべてのものを少なくともおおよそは提供するようにする」ために、エンゲルスが「マルクスの著書ではないもの」を編集するとしたら、それは、「架空資本」に関しても、第二九章(銀行資本の諸成分)と第三〇章(貨幣資本と現実資本)等の大幅な再編集が必要になったかもしれませんし、第二六章(貨幣資本の蓄積 それが利子率に及ぼす影響)もその詳しい論究は第三〇章以降に置き、これまた、大幅な再編集が必要になったかもしれませんし、第二八章(流通手段と資本)の配置もその中で大きく変化したことでしょう。その結果、大谷氏の言う「雑録」も「捜論」も、マルクスの『混乱』も、最終稿のための材料の部品になり、『資本論』第五篇は現在の『資本論』とはかなり異なるものになっていたことでしょう。

「貨幣」と「信用」と「貨幣資本」と「現実資本」の資本主義社会での複雑な絡み合いのなかで、「マルクスがこの篇に与えようと意図した」とおりに提供できるのは、無二の

友であるエンゲルス以外にいません。そのエンゲルスが決断し、行った手入は、必要最小限のものでした。その結果、第 25 章は、先に示した「第 25 章の概略」のような編集になったのです。だから、苦労に苦労を重ねたエンゲルスに対して、草稿第 5 章の編成を正しく読みとれなかったという大谷氏こそ、エンゲルスの編集の意図をまったく理解することができなかったといえることができます」と。

「第 26 章の概略」を見てもわかるように、第 26 章は「貨幣資本の蓄積」と「それが利子率に及ぼす影響」というこれまでのマルクスの草稿では本格的に論究されていない重要なテーマと、「貨幣資本」についても「貨幣資本」の蓄積と「利子率」との関係についても正しい認識をもっていないノーマンとオーヴァーストーンの謬論への批判とを、マルクスの草稿の順序を生かして編集したもので、もともと完成されたまとまった章ではありませんが、上記のような趣旨で編集されたものと思われまます。

なお、このようにやむを得ず行われた章の編集の身近な例として、第 28 章があります。第 27 章の「むすび」の部分でマルクスとエンゲルスは『資本論』第五篇の編集について、「これまでわれわれは、信用制度の発展——そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止——をおもに産業資本に関連させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する」と述べています。しかし、「信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察」しているのは第 29 章「以下の諸章」で、第 28 章はその橋渡しの文章の草稿です。だから、大谷氏が、「トゥクとフラートンとを批判した第 28 章部分には、さまざまの混同を伴っているトゥクやフラートンの議論から、この重要な区別をつかみだして提示し、それにもとづいて彼らの区別のあいまいさや不十分さや誤謬を批判するという作業が——明示的にではないにしても——含まれていてもよいのではないか、と考えられるのであるが、これまで見てきたように、この部分でのマルクスの記述にはほとんどそのような形跡を見ることができなかった」と第 28 章でのマルクスを責めています。第 28 章も、上記のようなエンゲルスの『資本論』編集にあたっての試行錯誤から生まれたもので、ここにもエンゲルスの『資本論』の編集についての大谷氏の無理解を見ることが出来ます。なお、念のために申し添えますが、大谷氏は上記のようにマルクスを責めています。第 28 章でマルクスとエンゲルスは「通貨と資本との区別と流通手段がそのときどきにもつ機能の区別」をしっかりとしています。

※なお、「第 28 章」については、このホームページに掲載しておりませんので、是非、この PDF ファイルをご覧ください。

この章の内容を吟味してみましょう。

大谷氏は、氏の言う「雑録」に続く「捜論」部分について、「貨幣資本の蓄積 それが生利子率に及ぼす影響」という表題をつけるのは、「きわめて一面的であって、それらの内容を表してはいないと言わざるをえない」(P220)と言います。

しかし、マルクスは、大谷氏の言う「捜論」部分で、ノーマンやオーヴァーストーンが「銀行業者」の立場で「貨幣資本」の需要を「資本」の需要と見て、借り手が必要とするものが「資本」としての貨幣ではなく「貨幣」そのものであることを見ないこと、したがって「利子率」が「貨幣資本」の需要と供給によって決まるということを見ないことを、『銀行委員会』での問答等を通じて批判しており、オーヴァーストーンが貨幣の価値は資本の価値だといひ、その資本とは各人がその事業に必要とするものだといひ、「貨幣資本」



が「資本」であるのは彼ら銀行業者が「利子を取って貸し出す」時であり、そのことによって「貨幣を資本に転化させるのである」（大月版『資本論』P9-10）ことをオーヴァーストーンの証言を通じて明らかにしています。

また、大谷氏は、「このような第 26 章の表題と内容と位置とが、第 5 篇の第 25 章以降の展開の筋道をきわめてわかりにくいものにし」た(P221)といい、「草稿によって見ると、エンゲルス版で見られるのはかなり異なった筋道が見えてくるようにも思われるのであるが、ここでは立ち入らないことにする」(P222)といます。

もう一度、先ほど見た第 27 章の“むすび”の部分の言葉を思い出して下さい。

マルクスとエンゲルスは、「これまでわれわれは、信用制度の発展——そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止——をおもに産業資本に関連させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する」と、『資本論』第五篇の編集についての共通認識をもっています。なにか違った「筋道」があるなら、大谷氏は、そのことにこそ「ここで立ち入らなければならない」のではないのでしょうか。

### この章でのエンゲルスの挿入文に関する青山のコメント

『資本論』の544～547に挿入されたエンゲルスのコメントのなかで、貨幣の前貸・資本の前貸等について述べられている部分で同意できない点がありますので、表明させていただきます。

エンゲルスは、①担保なしの貸付は貨幣の前貸であり資本の前貸であるといい②担保ありの貸付は貨幣の前貸ではあるが資本の前貸ではないといい③手形の割引は前貸ではなく売買だといいます。ここでいう「資本の前貸」が、生産的資本・現実資本の増加のための資本の前貸という意味であるとすれば、エンゲルスの①と②の区分は正しくありません。なぜなら、担保の有る無しは「資本の前貸」かどうかには関係ありません。「担保」された“モノ”は、ただ「担保」とされているだけで、資本としてその人のもとで生きています。「資本の前貸」であるかの基準は、「貨幣の前貸」が一時的な支払手段としてではなく、商品の購入として、それも消費財の購入ではなく資本財の購入の手段であるかどうかにあります。

なお、エンゲルスは、第28章(P582－583)でも同様な主張を行っていますが、ここでは「有価証券」を担保に入れ、その有価証券は「準備資本として機能するべき任務をもっていた」との前提があるので、この場合は「貨幣の前貸」ではあるが「資本の前貸」ではありません。

### 〈第27章〉について

大谷氏は、草稿第 5 章の編成を正しく読みとれなかったエンゲルスが自分の誤った理解に合うように手入れを行い、そのような手入れの箇所が多くが第 25 章および第 27 章に当たる部分に含まれているといい、そのことを明らかにするために本書 2 巻の第 5 章と第 7 章を書いたと言っていました。

しかし、第 7 章での〈第 27 章〉についてコメントを見ると、「その内容はほぼマルクスの草稿と一致しており、第 5 篇のなかでも、エンゲルスによる加工が相対的に少ない部分に属している」(P275)と述べられており、エンゲルスが自分の誤った理解に合うように

手入れを行った箇所の指摘はありません。

その代わりに出てくるのが、第 25 章「本文部分」と第 27 章との間にある「雑録」と「捜論」から第 25 章と第 26 章をエンゲルスが編集したが、「第 25 章本文部分と第 27 章とを『信用制度概説』としてつかんでみる」ことによって、「第 25 章本文部分は、信用制度とはどのようなものかを述べ、第 27 章はその信用制度がどのような役割を果たすのかを述べている」ことが分かるという主張です。

しかし「〈第 26 章〉について」の中で触れたように、この章(第 27 章)の“むすび”の部分で、マルクスとエンゲルスは『資本論』第五篇の編集について、「これまでわれわれは、信用制度の発展——そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止——をおもに産業資本に関連させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する」と述べています。

これまで見てきたように、第 21 章から第 24 章が「利子生み貨幣資本」について、そして、第 25 章から第 27 章までが「信用制度の発展」について書かれており、エンゲルスが「序文」で述べているとおり、マルクスの草稿に沿った編集がおこなわれています。私たち庶民が、重箱の隅を突つくことを目的とせず、当時のマルクス・エンゲルスから彼らの考えを学ぶ上でエンゲルスが編集した『資本論』は、マルクスの草稿よりも丁寧でわかりやすく書かれており、たいへん貴重な古典といえ、多くの若い人に読んでいただきたい書物群の一つであることは明らかです。